

東北の被災地も新盆を迎え、仮設住宅の門前では、新たに移り住んだ場所を亡くなったご家族に知らせるために迎え火を焚く光景が多くみられたといいます。宮城県南三陸町では、お盆の期間に、当地の伝承切り紙「きりこ」が広場に飾られました。風にハタハタとはためく全国から集まった数百枚のこの白い「きりこ」が、人々の鎮魂の思いを三陸の海へと届けたそうです。

今月は、今夏に中国の黄土高原・延川から届いた剪纸を一部、ご紹介します。

この地域の剪纸は元来、女性たちが家族の健康や家の幸せを思って正月飾りや結婚式の装飾として作るものですが、80年代以降は剪り手の女性たちが神話や民謡等の物語、さらに自身の人生の一場面の回想など、多彩な主題を表現する手段にもなっています。自分たちの村に初めて電気が通った日の宴、村から街の病院へ連れて行く手段がなく、病にかかったわが子に母である自分が点滴を施して治した!という誇らしいエピソード、はたまた1997年の香港の中国への主権移譲といったTVで見たニュースまで、あらゆる出来事が鉄に思いを託して剪り表されます。

ご紹介する剪纸は、延川の民間文化研究者でもある馮奮氏の呼びかけで、日本の震災の被災地のニュースを見た女性たちが剪った作品です。延川がある陝北地域は地震はほぼなく、四川の大地震の際は初めての大地の揺れを経験し、みな驚いてヤオトンから外へ飛び出したとか。自国の大震災がもたらした悲劇の記憶はこの地域の人々

にも深く刻まれ、3.11の日本の被災地を映し出した報道を見て動揺し、心を痛めたといいます。「家族を想う気持はみな一緒」という日本の被災者の方々に向けた思い、「みんなで助け合おう」という温かいメッセージが、彼女たちが想像力を働かせて剪ってくれた様々なかたちから伝わってくるようです。

- 企画者：馮奮(以下、敬称略)
- 剪纸を送って下さった作者：劉曉娟、程東梅、劉真榮、賀彩蓮、賀彩虹、王金娥、王彩萍、高秀芳

● 丹羽朋子(にわたもこ) —————  
 中国の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」を運営。著作に『ものの人類学』(共著・京大出版会)、編訳書に『魯迅の言葉』(平凡社/中国・三聯書店)など。本エッセーのバックナンバーは一芯社のサイト(<http://yixinshe-books.jimdo.com/>)に掲載中。



